

## 令和元年度 第6回沼田市市民構想会議の概要について

- 1 日 時 令和元年12月3日（火）午後2時から午後4時02分
- 2 場 所 沼田市役所 第2委員会室（テラス沼田5階）
- 3 出席者
  - （1）委員 金井竹徳委員、小林昭紀委員、生方秀二委員、岡嶋稜子委員、小野里順子委員、長谷川清委員、角田郁子委員、六本木勇治委員、林 康夫委員、石澤雄一郎委員、小林 好委員、山田龍之介委員、萩原忠和委員、原口庄二郎委員、小池大介委員（15名）
  - （2）アドバイザー 篠田 暢之氏
  - （3）沼田市 五十嵐副市長、川方総務部長  
（事務局：矢代企画課長、武井補佐兼企画係長、小野里主事）
- 4 配付資料
  - 次第
  - 第5回沼田市市民構想会議の概要について
  - 比延地区自治協議会の活動紹介
  - 黒田庄まちづくり協議会の活動紹介
  - 持続可能な開発目標（SDGs）
  - テラス沼田フロアガイド
- 5 概 要
  - （1）開会（事務局：企画課長）
  - （2）会長あいさつ（生方秀二会長）
  - （3）前回の会議結果について（事務局：企画課長）
    - 「第5回沼田市市民構想会議の概要について」により説明した。
  - （4）議題
    - 1) 『少子高齢化対策』について

<主な意見>

    - 子どもがたくさん生まれることも大切だが、第一に魅力のある沼田市にしていくことが必要だと思う。沼田の良さを見つけ、輝かせていくことで魅力のあるまちになり、住む人も増えていくのではないか。
    - 昨年、内閣府で40歳から64歳を対象に引きこもり実態調査が行われた。回答数が3,248件（回答率：65%）であり、その中で広義の引きこも

り群は47人（男女比3:1）であった。これを全国に置き換えてみると約61万3千人が引きこもりという推計が出ている。就労状況は無職が76.6%、専業主婦が12.8%、家事手伝いが6.4%となっている。家族構成は母親と同居が53.2%と最も多く、親の収入に頼って生活している人が多いと考えられる。2年ほど前に15歳から39歳を対象に同様な調査が行われたが、約54万人が広義の引きこもりという推計が出ている。少子化が進んでいるため、今後も引きこもりの数は増えていくのではないかと思う。これにより社会保障なども影響を受けると考えられるので、沼田市においても財政基盤を整えていくことが大切だと思う。

- 沼田市の子どもは中学卒業とともに市外の高校へ進学することが多い。その子ども達を沼田に引き留める魅力ある高校にしていくことも大切である。
- IT関連やインターネットを利用し、時代にあった取り組みをすることで、優秀な人材の定着を図っていくことが重要だと思う。
- 今年、利根沼田の小中学校にエアコンが設置された。ありがたいと思う反面、今頃か、と思うところもあった。
- 少子高齢化を止めることは難しいと思うので、少しでも人口減少を遅らせる方法を考えていくべきである。例えば昭和村では農業後継者となる若者の育成を行うことで、人口減少にも歯止めがかかっている。沼田市では新しい市役所ができたが、核になるものがない。そこにどうやって人を招き入れるのか、また、地域に活力を取り戻すことが沼田市の課題であると考えているので、そうしたことを議論していきたい。
- 色々な取り組みを同時にはできないので、ターゲットを1つに絞って全員でそれに向かって頑張ってはどうか。
- 沼田市は、みなかみ町や片品村に比べると遅れている。民間の力で取り組んできたが、それだけでは追いつくことができない。
- 白沢町の望郷の湯は田園プラザより安く農産物を販売していても観光客はイメージで田園プラザに行ってしまう。会議をするだけでなく、何か行動を起こすべきである。
- 沼田市は住みやすい場所ではないと感じている。
- 老朽化した公の施設が次々と使用中止になるなど、市街地から離れた地域が切り捨てられているように感じている。
- 観光で沼田市を盛り上げようとしても、市民が観光に対する想いを持っているのか疑問を感じている。
- 地域の活性化をしないと沼田市は元気にならない。活性化といっても色々な切り口があると思う。例えば歴史や農業、福祉あるいはその地域が取り組みやすいテーマを定め、住民が中心となって取り組み、それを行政が支援してはどうか。また、人口減少が進み、高齢者ばかりになってしまった地域に

対しては、行政がてこ入れをしてはどうか。

- 前回、篠田先生から「前提を疑え」とのアドバイスがあったが、少子高齢化での前提は、若者がいないと高齢者ばかりになり、まち全体が衰退していくということだと思う。が、少子高齢化は、日本全国で進んでいるので地方で若者を増やそうとしても難しいと思う。若者を増やして頼るのではなく、元気がある高齢者が増えれば、高齢者の割合が高くても、衰退していかないのではないか。
- 利根町が切り捨てられている感じがするという意見があったが、SDGsの「誰1人置いていかない社会」の考えが取り入れられると思う。
- 悲観的な意見が多いが、未来志向の積極的な議論をしていかないと、時間が過ぎていくだけである。
- 沼田は都心から近いので、移住を促進して人口を増やすというよりも、交流人口を増加させた方がビジネスにも繋がり、沼田の魅力を発信できるのではないか。

#### <アドバイザー意見>

委員のご意見ご指摘は沼田市の現状が映し出されたものと思います。しかし沼田市が抱える問題の相当部分は、全国の地方都市が抱えている問題とも重なり、解決を急がれている課題です。

沼田市は利根沼田広域圏の中心として、全国的に知名度の高い立派な観光の目玉が多くあります。しかし、それらのメリットを存分に活かしきれていない現状が沼田市の街の魅力を薄めているように思います。沼田を拠点に豊かな自然や温泉文化を誇る施設、歴史遺産でもそれらが個別に扱われ人を引き付ける強いアピールにつながる総合的な工夫が残念ながら今ひとつ不足していると感じます。

この点は、議題の「地域コミュニティの再構築と拠点づくり」にも関係する内容でもあり、今後の議論に期待したいと思います。今や少子高齢化の現実を前に地域コミュニティの再構築の課題をどう乗り越えるかが問われています。日本は2006年から本格的に人口減少が始まり14年が経過しました。人口問題の専門家は1970年代の半ばに若年者層が高齢者層よりも減少した事実から、日本の人口減少が経済活動や社会生活に与える影響について警告し続けました。以来およそ40年近くが経過した今日でも、この問題が地域社会の在り方や地域経済の活力を奪う現実となり始めている事は誠に残念です。

急速に進む少子高齢化による課題は沼田市の皆さんの医療や年金問題など社会保障の在り方について議論する喫緊の課題です。この問題は沼田市のこれからをどうするかという議論とも重なるからです。あと20年もすれば団塊世代ジュニアの大量退職が始まり、新たな社会問題がさらに日本を襲います。

前回、マツコ・デラックスさんのCMを、沼田市の諸問題を考える際にも必要な考え方であることから、問題提起として話題提供させて頂きました。「前提を疑え」という言葉は、「発想」を変える必要性が強く求められる時代にこそ意味があるからです。沼田市の未来を考える場合にも、このような自覚が求められており大胆な『発想の転換』の必要性が求められているのです。

「考え方を考える」議論が求められている時代を前提にこの市民構想会議もそうした自覚に基づく議論が必要です。私たちが経験したことが無い人口減少社会を前に私たちが従来の物の見方や価値観を変える必要があるのです。

今までのように成長を期待できない社会では社会的成熟が期待され求められます。『成長から成熟へ』の社会変化をプラスの発想でとらえ直し未来の暮らしのメリットを存分に利活用すれば、まだ沼田市の可能性を広げることも可能です。人口減少は1人が占有できる居住面積は広がります。高齢社会になればなるほど余暇の使い方は多様化し生活の為に働く労働から解放された人々によって社会貢献活動の多様性が生まれ社会を支える機会が増えます。世代的に人口のあつい層が積極的に社会貢献すれば、街は従来と異なる新しい活力が生まれます。そうした力が地域の支えとなっていくことは明らかです。

晩婚化や生涯独身者が増えている問題は難しい問題です。2015年の男性の生涯未婚率は23.4%に及び、自治体はこの問題の対応策として婚活イベント等の取り組みを進めていますが、男性の結婚意欲が低下しており成果に結びついていないのが実態です。国が目標として定めた生涯出生率向上には限界があります。文明が進んだ国では間違いなく少子高齢化が進み、その対策に取り組んできましたが、残念ながらここでも成果は上がっていません。

沼田市の人口は4万8,338人（平成30年）ですが、ヨーロッパ諸都市からみれば、その規模は中規模の町に属します。人口が1万人や2万人でも世界的な観光地はたくさんあり、そこで若い人がたくさん働いているかと言えば必ずしもそうでなく中心はお年寄りです。昼間から元気なお年寄りが街の中心地に集まり様々な交流を楽しみ、街を支えています。しかし日本の地方都市は残念ですが確実にゴーストタウン化しています。沼田でもご承知のように昼間からシャッターが閉まり、街を歩く人の姿をあまり見かけません。

これも全国的傾向ですが、答えは簡単です。このような社会が来ることが分かっているがそれに備え、準備をしてこなかったからです。ご指摘にもある「未来志向で行きましょう」という、これからどうするかに踏み込んでいかないと、一層厳しい状況に追い込まれることは明白です。こうした議論のタイムリミットは2023年がひとつの節目になると考えられます。新しい機軸を早急に打ち出しそこに市民的総意を結集して市民の方々が暮らしを前向きに楽しんでいける街づくりへと進める取り組みが必要です。

前回の会議で広報力の向上の検討において、沼田にはたくさん宝物があります

ぎて良さが分散している状況だという指摘と議論がありました。的を絞ればそのパワーは何倍にもなると思います。インバウンドの議論が日本では盛んですが、ここでも冷静な理解が必要です。この30年間の日本の成長は1.45倍でしたが、中国は5.7倍です。この現実には現在の日本の国力の衰退を語っていません。インバウンド効果を否定するものではありませんが、基本はここに住む人々の暮らしが楽しくなるように街の条件を整えることが最重要です。中国をはじめアジアの方々が大量、日本を訪れるのは、外から見れば安く日本で旅が出来るからです。その事にのみ目を奪われ過ぎると、日本人観光客の足も遠のき、ここに住む人々の暮らしはやせ細っていく事になりかねません。

日本で人口増を期待することは出来ません。世界の先進国で取り組まれてきた人口増加政策はいずれも成功していないのです。人口を一気に意図的に増やすことが極めて困難である事はこうした取り組みからも明らかです。

人口が減少していく中で、高齢者となられるお年寄りが増えても、そうした皆さんが少しでも快適に楽しく生活できるようにするにはどうしたら良いか考え合うことが何より重要です。それには従来のシステムではなく、新しい視点に立った社会の在り方を議論すべきではないかと思えます。

## 2) 『地域コミュニティの再構築と拠点づくり』について

<事務局>

○ 「比延地区自治協議会の活動紹介」、「黒田庄まちづくり協議会の活動紹介」、「持続可能な開発目標（SDGs）」について説明した。

<六本木委員からSDGsについて説明>

SDGs（持続可能な開発目標）は、私たちの生活や仕事などに関して、地域でどうしたら持続可能なものに変えていけるのかという考え方です。世界中で取り組みが始められており、県内でも上毛新聞で取り上げられるなど、様々な地域で取り組みが始まっています。その地域で持っているものをどうやったら持続可能なものにできるのか考え、再生産・継続していくというものです。

例えば配布資料の2つの地域における協議会の活動紹介もSDGsに関わっていて、地域の1人1人が自分たちの地域をどうやったら持続可能なものにしていけるのかという考え方で、特に、高齢者や子供などのサポートを地域全体でやりましょうという動きであると思えますが、若い人や子供にとっては理解しづらい部分がありますので、SDGsは配布資料のようにイラストを用いることで、子供から高齢者まで全ての人に伝わりやすいようにしています。

<主な意見>

○ SDGsは目標の「ゴール」というより「ツール」として考えると地域コ

コミュニティや地方再生の役に立つのではないか。現状を考えるのではなく、目標を立てることで未来に向かって取り組んでいくというSDGsの考えを取り入れてはどうか。

- 年齢や世代の壁をなくしたコミュニティを作っていくことが必要だと思う。人形芝居や歴史の会をやっているが、小中学生も参加しており、職業や世代はほとんど関係ない。学校の先生から最近の子供は学年によってあまり親しくないと聞かすが、こういった組織に参加している子供は年齢に関係なく、学年の壁を超えて親しくしている。様々なコミュニティの中で、子供たちも年齢に関係なく、力を発揮してくれれば良いと思う。大人の固まった意見だけではなく、子供の柔軟な意見を取り込んでいく事も大切になってくると思う。
- 利根町で20年ほどボランティア活動をしているが、活動を始めた頃は親子が20組ほど集まっていたが、年々参加者が減り、現在は少ない時には2組ほどになってしまった。
- 16年前から子供たちに日本舞踊を教えているが、毎年20名から30名程の子供が参加している。今の時代は子供に対して様々なことにお金をかけなければならないので、お金をかけなくても学べるように浴衣1枚、扇子1本あればできるという形で指導をしている。
- お金をかけないで教育したい、などの教育格差、経済格差のないような形で日本舞踊を教えているというのも、やはりSDGsにつながる発想であると思うので、市で宣伝し、ものの考え方や物事に取り組む姿勢を市民へ広めていくことが大切だと思う。

#### <アドバイザー意見>

まちづくりを楽しく進めるためには「ときめき」が必要です。この町の未来を新たに創出するエネルギーとして「ときめき」を感じられる仕掛けと工夫が大切です。街には素敵な素材が多く散見できるのにそうした素材や条件が人の心を動かす「ときめき」につながらず、有効活用ができていないと感じます。

ひとつの例として、「ときめき」創出では、兵庫県の城崎温泉に隣接した出石（いずし）という小さな町があります。「皿そば」で有名な街ですが、ここも衰退する一方の街でした。しかし、今はうって変わり、観光客が集まる街へと変貌しました。ソース・ブームに目をつけ、出石の特産の山椒を、町を挙げて山椒ソース作りに取り組みそれが大ヒットしたのです。これを契機に観光客も増えたのです。宝物を山椒1つに絞り、知恵を絞ってそれを様々なメディアで広報した結果、観光客が増え、出石城の整備や街の景観整備もできる好循環が生まれたのです。

出石のように背水の陣で取り組んだ町が上手くいき始めています。沼田には立派な温泉も複数あり、自然環境にも恵まれています。森林文化都市と宣言し

たこの街に、その具体的な森林の文化を「ときめき」として市内にいる限り感じません。愛知県の春日井市は大手の製紙会社がありその縁で何とか森林文化都市を標榜したかったようですが当時、森林破壊の環境問題からその取り組みが頓挫しました。そこで視点を変えて、巨樹、古木の調査を市民有志がはじめ、その成果を専門家の力を借りて一冊の本を編集・出版したところこの街を訪ねる人が増えたと言います。沼田の巨樹、古木、希少樹種を市民の方がどれだけご存じなのか知らなくては、沼田を訪ねる外の方にはその貴重な沼田市のキャッチ・コピーが伝わりません。

つまり素材はあるのに、街の魅力を、ここに住む方が踏み込んで誇りをもって理解できていなければ、ここを訪ねた人にも伝わらず結果は見えています。今一度、市民合意の下で沼田の魅力を絞り込む議論が必要です。絞り込み特化していく事で広がりができ、それを端緒として、あらゆるものとの関係性が生まれて、経済の好循環が始まり、明るさがよみがえってくると考えます。

#### <質問>

- 薄根地区かるたはまさに地域コミュニティの再構築だと思うが、大会などの広がりはどうなっているのか。
- 育成会が中心になって取り組んでいるが、子供の数が減っていることもあり、役員が低年齢化してきている。育成会で薄根地区かるたの大会を開催するという事は難しいが、かるたを作った元気会では今年から大会を開催している。かるたは歴史を中心に作っているが、歴史だけではネームバリューも低いので、歴史プラス何かを掛け合わせたものを考えないと外から人は来てくれないと思う。

#### <アドバイザー講評>

今朝、街を歩き交う人々の姿を興味深く見ていたところ、バスが通り過ぎました。バスの「行き先」表示に、私の目は釘付けになりました。「鳩待峠行き」とあったからです。何故か分かりませんが、この地名になぜか胸にあついものがこみあげ感動しました。素晴らしく文学的な地名が普通にあることに身震いを覚えました。沼田の文化的な素晴らしさを思い知らされた瞬間でした。

現代の経済活性化には「物語性」が欠かせません。消費を促す力が消費者に訴える物語が無ければ消費を喚起出来ないと考えられるようになったからです。『物語消費』といわれ、物語することで消費が生まれ、その効果がさらに新たな消費を創り出すという好循環が始まるのです。

街の宝物を物語にすることで新しい沼田の未来が切り拓かれていくと考えます。次回も皆さんからのご意見に期待しています。

### 3) その他

- 六本木委員から12月8日(日)14時からテラス沼田で利根沼田夢大学の発表会を開催する旨の紹介があった。
- 次回の協議事項については、引き続き「地域コミュニティの再構築と拠点づくり」と「テラス沼田の具体的利活用の改善」についての意見を伺うこととした。
- 次回、次々回の会議日程について、事務局から次のとおり調整したい旨を説明し、確認いただいた。

＜第7回＞ 日時：1月21日(火) 午後2時

＜第8回＞ 日時：2月20日(木)

(5) 閉会(事務局：企画課長)